

2021年12月30日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 宮内 健
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 児童の「きく」力とその説明要因が学力に及ぼす影響と介入効果
論文題目（英文） The Relationship between Children's Listening Ability, Influencing Factors, and Academic Ability: Interventional Effects on Children's Listening Ability.

公開審査会

実施年月日・時間 2021年12月10日・11:00-12:00
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 210教室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	向後 千春	博士（教育学）	東京学芸大学	教育工学
副査	早稲田大学・教授	井上 典之	Ph.D. (Educational Psychology)	Columbia University	教育心理学
副査	早稲田大学・教授	森田 裕介	博士（学術）	東京工業大学	教育工学

論文審査委員会は、宮内健氏による博士学位論文「児童の「きく」力とその説明要因が学力に及ぼす影響と介入効果」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 質問：本研究における学力の定義を簡潔に示してほしい。

回答：小学校学習指導要領に基づいて作成されたテストの得点である。

1.2 質問：教科の学力は評定値，テストの得点のどちらなのか。

回答：テストの得点である。

1.3 質問：研究4で理科の学力が児童の「きく」力とその説明要因によって説明されると明らかにしたが、これは理科だけなのか、それとも他教科でも同様なのか、どちらだと考えているのか。

回答：本研究では理科が最も児童の「きく」力と関連があると示された。理科以外

では、算数科も児童の「きく」力と関連が高かった。社会科は本研究では関連は大きくなかった。しかし、内容や学年によってはその限りではないと推測される。国語科については、児童の「きく」力に関する内容は国語科の内容であるから、児童の「きく」力と関連があると考えられる。よって、他教科でも十分児童の「きく」力によって説明されると考えられる。

- 1.4 質問：児童の「きく」力は理科の探究のプロセスにどのような影響を与えているか、仮説を含めて、どのように考えているか示してほしい。

回答：課題について一人ひとりが考えた予想や理由を話し合い、交流することによって、さらに自分の意見が深まり、さらなる仮説や予想、理由が持てるようになる。児童の「きく」力によって支えられる話し合いによって、探究のプロセスが進化し、探究の力につながるのではないかと考えられる。

- 1.5 質問：この研究をふまえて、次にどのような研究デザインをして、実際の現場の課題を解決していきたいか。

回答：児童の「きく」力が教科の学力のどんな力と関係があるか検討したい。例えば、思考力などの資質・能力との関係を明らかにし、児童の学力向上に貢献したい。

- 1.6 質問：児童の「きく」力は論理的思考力とどのような関係があるか。

回答：論理的思考力は言語力に基づいて行われる。きいたことをもとにして自分の考えをもつことが論理的思考力の最低限のベースである。「きく」力は論理的思考力の前提条件であり、土台になる力だと考えられる。

- 1.7 質問：研究1の聴解基礎力因子と聴解応用力因子は研究2の児童の「きく」力の説明要因と示された漢字書字力と言語性ワーキングメモリとどのような関係、構造となっているのか。漢字書字力が基礎力で、言語性ワーキングメモリが応用力ととらえてよいのか。

回答：漢字書字力が、きいた言葉を正確に理解して、思考につなげることができる。よって、漢字書字力は聴解基礎力であり、聴解応用力である。一方、言語性ワーキングメモリの役割は、きいたことを理解して、そこから考えていくために保持することである。きいたことを理解する部分は基礎力であり、きいた内容を保持しながら思考につなげるという点では応用力と関係がある。よって、言語性ワーキングメモリも聴解基礎力であり、聴解応用力である。

- 1.8 質問：研究5のききとりシートの3観点のうち**Critical Thinking**に関することは「理由説明」の観点に関係すると思うが、どう考えているか。

回答：理由説明の記述が最も児童の思考につながる部分であるため、批判的思考力と関係がある。

- 1.9 質問：先生の話の理由説明に対して別の考えを記述した場合は正解とならないか。

回答：結論の記述次第だと考える。事実を基にしてどんな理由説明があり、どんな結論が導き出されたかによって、その記述が妥当であれば正解だと考える。

- 1.10 質問：この研究で得られた結果の一般性はどうか。

回答：一事例であるが、全国の小学校教育に参考となる結果である。今日の学校

現場では学習指導に関する情報があふれ、その軽重を判断することが容易ではない。また、約10年に1度、文部科学省より学習指導要領が示され、新しい考え方や内容を十分に理解・納得ができないまま、徹底することを求められている。このような状況の学校現場で、一事例ではあるが統計的な手法によって、信頼性と妥当性が検討されている結果として、十分参考となると考えられる。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が示された。

2.1.1 本研究では小学校学習指導要領に基づいて作成されたテスト得点を学力として定義している。この点を、論文の中で明記すべきである。

2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1 第4章第3節4(2)本研究の限界と展望で、広義の理科の学力は児童のノートの記述や学習活動の観察結果などの質的内容も含まれるため、今後はそれらの質的な内容も含めて検討することが必要であると追記した。

3 本論文の評価

3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、児童の学力向上に資するため、児童の「きく」力とその説明要因が学力に及ぼす影響と介入効果を検討することを目的とする。聴解力、すなわち児童の「きく」力が学びにおいて重要であることを示す指摘が多くある中、近年、授業中に話をきくことが苦手な児童が目立つようになり、その傾向は小学校全体に見られる。このため、今日の学校教育で、児童の「きく」力に関わる研究は、学力向上を実現するための重要なテーマであり、本研究の目的はそれに合致する妥当なものと判断できる。

3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文では、先行研究及び小学校学習指導要領に基づき、児童の「きく」力を測定するための心理尺度を開発した。また、それを用いて児童の「きく」力が教科の学力と関連があることを示し、さらには理科の学力の説明要因を検討するなど、各々の研究のつながりが妥当なものとなっている。データの分析方法については、先行研究等で適切とされる手法で解析されていることから、本論文の方法論も妥当なものとして判断できる。なお、本論文で実施した実験の手続きについては、児童の在籍する校長に研究目的、調査内容、調査方法、調査期間を事前に説明し、内容についての了承と同意を得た。児童へは、調査を実施する際、テストではないことや難しい項目や答えたくない項目はとばしてやらなくてよいことを口頭で説明した。よって、調査前には対象者に対して調査内容についての十分な説明を行い、インフォームドコンセントが得られた上で実施したとしており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、児童の「きく」力の説明要因が漢字書字力、言語性ワーキングメモリであること、児童の「きく」力が学力と関連

すること、「ききとりシート」の実践が児童の「きく」力を高めることが明らかになった。これらの知見は、本論文の目的と合致しており、児童の「きく」力や学力に関する先行研究と照らし合わせても、新たな示唆として妥当である。

- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 本論文では、児童の「きく」力に着目し、その説明要因を検討し、それらが児童の教科の学力と関連があることを見出している。これは従来にはない新たな視点であり、本研究の独創性として評価できる。
 - 3.4.2 本論文では、児童の「きく」力に着目し、理科の学力が児童の「きく」力と漢字書字力、言語性ワーキングメモリによって一定程度説明されることが示された。これらの点は、従来にはない新たな視点であり、本研究の新規性として評価できる。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
 - 3.5.1 本論文は、児童の「きく」力が教科の学力と関連があり、さらに児童の「きく」力の説明要因が漢字書字力と言語性ワーキングメモリであることを示しており、児童の学力向上に資するための新たな知見を提供している。この点において学術的意義があると考えられる。
 - 3.5.2 本論文は、児童の「きく」力とその説明要因が理科の学力を一定程度説明することを明らかにし、児童の学力向上に資するための具体的な知見を提供している。この点において社会的意義があると考えられる。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：児童の「きく力」は教育実践の現場で大切にされている実践知であり、その認知的側面にフォーカスを当てて研究を行うことは人間科学における教育分野の研究として価値があり、人間科学に対する貢献がある。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- ・宮内健，向後千春：2021 教室の学びにおける児童の「きく」力尺度の作成．読書科学，62巻3・4号，196-207頁．
- ・宮内健，向後千春：2021 児童の「きく」力とその説明要因が理科の学力に及ぼす影響．日本教育工学会論文誌，45巻2号，225-233頁．

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上